

第3回優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「月の夜」

恵泉女学園高等学校 三年 菅野澄子



賢治のまちから
高校生★童話大賞



2003 『賢治のまちから高校生童話大賞』受賞作品

優秀賞／銀の星賞

『月の夜』

東京都 恵泉女子学園高等学校 三年 菅野澄子

1

深い深い水の底には、藻草が絡まりもつれ合って出来た森があった。森は怖いほど静かで、光すら通さない暗闇が沈殿していた。

そこには、とりわけ大きな藻草の茎：木と言ってもいいほどだ：があり、その下に、そいつは住んでいた。左足を鎖に繋がれて動けず、毛むくじやらの体を丸めてうずくまり、気も遠くなるような時間独りで過ごしてきた。

そう、そいつはバケモノだ。

乱暴者のバケモノは、大昔ひどい悪さをしたため、水中の生きものの皆からこの深い水の底に閉じ込められてしまったのだ。：そんな事を覚えている生き物なんて、もうほとんどいなくなってしまったけれど。

バケモノは、いらいらしていた。死ぬほど退屈で仕方ない。一体おれは、いつまでこうしていたらいいのだろうか？ もう嫌だ、暴れ



賢治のまちから
高校生★童話大賞

たい！と、鎖を引きちぎろうとするのだが、この鎖は全く丈夫で、いくら引つ張つてもちぎれやしない。バケモノは、ますますいらいらしていった。

退屈しのぎに、頭を縦横に思いっきり振ってみた。ぎりぎり歯ぎしり。次は、恐ろしい形相の特訓。最後のとつておきに、水をもぶるぶると振動させる自慢のしゃがれ声で、ゾツとする吼え声を辺りに轟かせる。：でも、全てはすぐに元通り。森はやはり真っ暗で、静かで、何も起こらない。バケモノは遂に疲れ果て、ぐっすりと眠りこんでしまった。

それから、どれ位の時間が経つたのだろうか？バケモノは、目を覚ました。ぼおとした頭で周囲を見回すが、特に変化は見当たらない。：それもそうだ、おれ、何を期待してたんだ：？ バケモノは、ぐわわとあくびをして上を見上げた。

光など全く通さない、黒い天井。

しかしそこに、バケモノは普段との違いを見つけた。

あの漆黒の天井に、ちょうど針で穴が開いたように、ほんのかすかではあるが光りが見える。今にも消え入りそうだけど、確かにそれはあった。

バケモノは、食い入るようにそれを見つめた。ふつふつと、ある強い思いが体の底から湧き上がってくる。：欲しいと思った。あれ

を、おれのものになりたい！

そう思うと後は早かった。バケモノは夢中の力で、絶対に壊れないと思われた鎖を一瞬にして引きちぎった！そして自由になった体を力いっぱい動かし、光のある方へと泳ぎだした。あの光りを手に入れたくて、ひたすらに必死なのだ。

バケモノは、真っ暗闇の森の天井を突き抜け、深く濁った群青の世界に進入した。針の穴ほどに小さかった光りは、いつの間にか大きく広がって帯状になり、辺りをぼんやりと明るくしていた。もつとずっと遠くに、あの光りの根源はあるのだな。バケモノは意を決し、ぶくぶくと泡を残して上へとのぼっていく。

その内に濃い青から少しずつ水の色は薄れ、体を包む水の重さが軽くなったのが、バケモノには分かった。水面に近付いているのだ。

光りは絶え間なく水中世界に降り注ぎ、ゆらり揺れる透け布のようには翻っては、きらきらの粒子をばらまいている。バケモノは一層全身に力をこめて、水を掻いた。

ばしゃん！バケモノは、水中から外の世界へ飛び出した。

2

月、だった。異常な程大きい、真ん丸い形をした、青白く燃える月。それが水中に光りを降らせていたのだ。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

バケモノは月を見上げながら、水の中から陸地へと辿り着いた。ぼうぼうの毛は濡れてグショグショ、はあはあと息を切らすそのありさまは何とも惨めだ。

近くで眠っていた蛙がバケモノの足音で目を覚まし、驚いて逃げ出した。バケモノは蛙に目もくれず、草の上に座り込んで月を見つめた。心臓が口から飛び出しそうなほど、激しく高鳴っているのを感じた。

おれは、あの空の上のでっかいのを手に入れようとしているのか……。いいぞ、すごいぞおれ！ あれを手に入れたら、ボールみたいに蹴ったり投げたりして遊ぼう。それで皆に見せびらかしてやるんだ。きっと皆驚いて、おれに寄ってくるだろうなあ！ 何よりあれを自分のものにしたら、ずーっといい気持ちでいられそうだ。あんなにもきれいなんだから。

でも、気になることがあった。

どうしたら、月を手に入れられるだろう？

バケモノは、空を飛べない。水の中は自由に泳げても、どうしたって地上の生き物だ。飛ぼうとしてみても、ただ地響きが鳴り渡るだけ。そんなバケモノに、月を手に入れる術などあるはずもない。

認めたくない現実に、バケモノは歯をきつく噛みしめた。しかしそれでも、諦めたくなかった。バケモノはどうしても、あの輝くも



のが欲しいのだ！

バケモノは月に向かって、そっと手を伸ばしてみた。今にも触れられそうな気がするのに、全然届かない。その事実には、バケモノは愕然とした。

コオロギがリーンリーンと鳴いていた。草は風にサラサラ揺れて、木々はひそやかにざわめきだつた。バケモノは初めてそれに気付いたかのように、ゆっくりと辺りを見回した。

…ああそうか、とバケモノは思った。皆おれと同じで、あいつが大好きで欲しくてしょうがないのに、どんなに手を伸ばして背伸びしても、捕まえる事など出来ないのだ。皆おれと同じなのだ…。

鼻の奥がツンとわずくのを、バケモノは感じた。切ないのだから悲しいのだから、分からない気持ちだ。この初めての不思議な感情を、バケモノはどうすればいいか分からずに、もてあましていた。月はそんなバケモノを知ってか知らずか、青白く透き通る光線を世界に放射していた。

突然草むらから、ガサツという物音がした。バケモノはビクツとして、音のした方に振り向いた。

間もなくガサゴソと草を掻き分け、現れたのは猫だった。小さくてしなやかな体に白くふわふわの毛皮を身にまとい、大きな緑の瞳には、光る星を宿らせている。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

猫は、硬直しているバケモノの前をそ知らぬ顔で通り過ぎ、地面の窪みにすんと腰をおろすと、毛繕いをやりだした。バケモノはあっけにとられ、丹念に体を舐める猫を見つめた。

どえらい奴だ…こんな月が照る晩、何にも目を向けず、一身に毛繕いをしてるなんて！ しかも、横にはこのおれがいるんだぞ？ 水中では誰からも恐れられ、嫌われていたこのおれが！

それで、この猫に興味が沸いたバケモノは、「おい」と猫に声をかけた。だが猫は、バケモノの声なぞ聞こえないようで、全く反応せず。黙々と体を舐めている。もう一度呼んでも同じ。そのまた次も同じ結果だ。

バケモノはじれったがって、爪の尖った手を猫へ伸ばした。途端に猫は、ぱっと身を翻してバケモノの手をよけた。そして何事も無かったように、とことと歩き出した。

「…何っなんだよお前え？」

ますます訳が分からない。こいつ、一体何を考えてやがるんだ？

その時、ちらつと猫が後ろを振り返った。バケモノははっと息を呑んだ。二匹は数秒、お互いを見つめあった。風がさあつと、二匹の間を通り過ぎた…。

ふと猫は、再び前を向いて歩き出した。バケモノは引力に引かれ



るように、猫の後ろを追いかけた。

奇妙な光景だった。月がとても美しく輝く晩。つんと澄まして歩く猫の後ろを、世にも恐ろしいバケモノが一定の距離を保ってついていつているのだから。

しばやくはお互い黙って歩いた。

バケモノはまた、口を開いた。

「…なあ、これからどこに行くんだい？」

「……」

「お前さ、どっから来たんだ？ どんどこに住んでんだ？ …なあってば。

聞こえてるんだろ？ 少しは答えろよ、なあ」

「……」

「…あーっそっ！」

バケモノは、不機嫌に大声を出した。

「別にさ、おれ、お前のことなんて知んなくてもゼーんぜんいいけどさ？ ただ、聞いてやっただけだよ。そうさ、知らんくったってなんっにも困らないさあつ！」

結局バケモノは、猫から話を聞く事を諦めたが、負け惜しんで大声で言い訳をしているのだ。そんなバケモノの声を聞いているのかいないのか、猫は相変わらず振り返らないままだったが。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

バケモノは完全に拗ね、そっぽを向いてしまった。横を向くと、月光によって照らし出された草原の風景が、自然バケモノの目に映し出される。ふいに気を惹かれ、バケモノは目を凝らした。草原の奥、地平線の近くには、小さな灯りが点々と散らばっている。バケモノが藻草の檻に閉じ込められる以前には、なかったものだ。

あれは何だろな…と考えつつ、バケモノは適度に湿った夜の空気を、思い切り吸い込んだ。青臭い草の匂いが、全身を駆け巡ってゆく。これからとても素晴らしいことが始まるような、変にわくわくするような匂い。

「…いい夜だなあ」
と、バケモノはつぶやいた。

その時、

「…みやおう」
と猫が小さく鳴いた。

バケモノはびっくりして猫の後ろ姿を見つめた。が、すぐにたりと笑った。

体中むずむずくすぐったい気がするの、何でだろう？

やがて二匹は、視界の開けた広いススキ野原に到着した。

着くやいなや、猫は一目散に駆け出した。ススキにじゃれついて、ごろごろと転がっている。バケモノが近付こうとすると、猫は「み



やうつ！」と鋭く鳴き、さっと起きあがって走り出した。

さあ、鬼ごっこの始まりだ！

バケモノが鬼で、猫が逃げる。バケモノは必死に猫を追いかけますが、身軽ですばしこい猫にはどうしても追いつけない。

「おい！ ちよつと待ってくれよお！」

と、バケモノが情けない声を出すと、猫は不敵に、楽しそうに

「みやああ！」

と叫んだ。二匹は夢中になり、動けなくなるまでぎゃあぎゃああと騒いで走った。

バケモノは内心、嬉しくてたまらなかった。こんな事は初めてだ。昔は皆おれを恐れて、誰もおれに近づこうとしなかった。それどころか軽蔑していた。

おれはいつだって寂しくて、皆に振り向いてほしくて、悪さばかり繰り返してたんだ…。

寂しさ悲しさ、怒り。頂点に達し、むしゃくしゃしてしようがなかった日。バケモノが泳いでいると、「鯰のヌシ」が、バケモノの悪口を言う声が聞こえた。(長生きで、水中の皆から尊敬され、それまでバケモノの悪口など一つも口になどしたことがなかった、あの、

「鯰のヌシ」でさえ…！)

何かブツンと、バケモノの中で切れた。バケモノは、物凄い勢

いでヌシに飛びかかっていた。我に帰ると、気絶しているヌシがいた。

バケモノの拳は血まみれ、ヌシは体中傷だらけ、息も絶え絶え。それでも気持ちは収まらず、バケモノは水中のありとあらゆるものを破壊していった。力が尽きて動けなくなるまで、遂に捕まえらるるその時まで。岩を砕き、藻を引っこ抜き、止めようとするものは容赦なく攻撃した。

これが、バケモノが藻草の檻に長い間囚われていた、そもその原因だ。そうしてそこで過ごす内に、バケモノは、次第に存在すらも忘れ去られてしまっていた。とうとうバケモノの気持ちだが、皆に通じることとはなかったのだ。

：誰も居ない暗闇の中、バケモノの孤独は、嫌がおうにも増すばかり…。

けど、今のバケモノは違う。

猫がいる。

だからこそ本当に嬉しくて、バケモノははしゃぎまくった。

3

遊び疲れた二匹は、地面に寝転がった。夜は更に更け、二匹が遊びに夢中になっている間に、月も空の上を移動したようだ。とうとう



賢治のまちから
高校生★童話大賞

ととしているバケモノには、月にはじんで淡く輝く円のように見え
た。

少し経ってから、バケモノと同じく半分眠りかけていた猫が、頃
合いを見計らったようにいきなり起き上がった。そしてバケモノに
は見向きもせず、元きた方向へと歩き出した。バケモノは物音で目
を覚まし、慌てて猫を追った。

「いつ、いきなりどこ行くんだよ？おれたちまだまだ遊ぶんだろ
っ？」

しかし猫は何も答えようとせず、ただきらきらと輝く瞳でバケモ
ノを見つめた。バケモノもまた、猫の緑色の目を覗き込んだ。する
と：バケモノには見えた：バケモノの知らない、あったかい世界：
…：猫が大好きな、猫の棲んでいるところが…。

まざまざとそれらを見せつけられている内に、バケモノの中で何
かが、ザワザワと鳴りだした。

『柔らかい寝床』。やめろ…見たくない。(…どうして?) 見たく
ないんだ…。

『抱きしめてくれる腕』。やめろっやめろやめろ…(何でこいつだ
け?) …や…めろやめろやめろやめろっ…やめてくれ!!

お願いだから…『帰るべき場所』。

「何でおれじゃないっ!？」



一瞬にして、バケモノの体が憎悪で膨れ上がった！ 目はららんと凶暴な光をたたえ、毛は逆立ち牙は鋭さを増し…、バケモノはこの爪で、目の前の猫を八つ裂きにしたい衝動に駆られた。

『あったかい場所』

バケモノは長い時を、冷たい水底にある檻で過ごした。そして生まれ落ちた時から、ずっとずっと独りぼっちだった。

：何で、どうしてこいつが持っているのだろう？ おれには無いもの全部を。いつそのことこいつの全てを奪って、めちやくちやにしておしまえばいい！…でも、そんな事をバケモノに出来るはずがなかった。もうこんなにも、猫を大好きになってしまっているバケモノが、そんなことを出来るはずがない。

だけど、こいつが憎くてしようがないのだ！…ズルイ。こいつはズルイ。何でおれじゃなくてこいつなんだ！？

余りの苦しさに、バケモノはうめいた。猫が憎くて憎くてどうしようもない。

だがそれ以上に、バケモノはこんな自分自身が憎くてたまらなかつた。

バケモノは、空の上の月を仰いだ。

こんな時でもまた平然として、月は万物を平等に明るく照らし出す。非情でありながら、その行為は何と優しいのだろうか！



ぼろり、と涙がこぼれた。

それを皮切りに、バケモノの瞳から大粒の涙が滝のように流れ出した。：もう、止まらなかった。

バケモノは体を震わせ、大声で泣き叫び、月に吼えた。

おおん、うおおん、おおん……：

おれには、何も手に入らない！ 猫も、月も、あったかい場所だつて！ 欲しくて欲しくて死にそうなのに……なのにおれは奪う事が出来ない！ そんな勇氣は無いんだ。だっておれにとっては、全てが大切だから：結局何も掴めずに、醜く嫉妬して焦がれるより他ないんだよ。：どうして、おれはおれなんだ？

こんなのあんまりじゃないか。なあ月よ、答えてくれ：

ぼろりぼろりと涙は流れ続けて、いつのまにかバケモノの足元には、大きな水溜まりが出来ていた。気付けば、猫もバケモノの涙のせいで、びしょ濡れになってしまっている。

それを見て、また涙が溢れた。バケモノはしゃがみ込んで、猫に心から謝った。

「ううっ……ごめん、ごめんなあつ……！ご、ごめん………」

猫は輝く瞳で、不思議そうにバケモノの顔を見つめていた。濡れている事など全く気にならない様子で、しっぽを振っている。

それから、そっとバケモノの顔に自分の顔を近づけると、ぺろり、



とバケモノの涙を舐めた。まるで慰めるかのように、温かい舌でぺろりぺろりとバケモノの涙を舐め続ける。

バケモノはびっくりして一旦泣き止み、されるがままになっていたが：今度は静かに、泣き出した。

月はやわらかな光を放ち、風は穏やかに草木を揺らす。コオロギが子守唄を歌いだした。：いい夜だ。良い夜が、世界を包んでいる。

4

バケモノはすっかり泣き止んだ。一つ名残りとして、すんすんと鼻を鳴らすだけ。その様子を見て、猫は安心したように微笑んだ。

そんな猫の目を見て、バケモノは思っていた。：そうだ、この眼差しは、今までずっとおれが向けられてきたものと全然違うんだ。

とつてもあったかくて、とつてもとつても優しい…。そう思うと、胸がじんわり熱くなるのを感じた。

バケモノは半分泣きそうな顔で、自分もまた微笑んでいた。

その時、唐突に猫は、すつくと立ち上がった。そしてバケモノの目を真っ直ぐに見つめ、ただ一声、

「みやおうっ」

と鳴くと、もう決して振り返らずに静かに去っていった。大好きな我が家に帰るのだ。



バケモノはその後ろ姿を、見えなくなるまでずっと見つめていた。少しだけ胸がいたむけれど、それには気づかないふりをした。

猫の姿が完全に消えてしまうと、バケモノは立ち上がって空を見上げた。

月は未だに照っているがほとんど白くなり、空の色もだいぶ薄れてきている。

夜明けが、もうじきに迫っているのだ。

バケモノはきゅっと口を引き結び、猫が行ってしまった方とは、反対の方角へと走り出した。行き先は分からない。だけど、どこかに行かなきゃならない気がした。

鳥の鳴き声が、遠くから聞こえる。東の空の雲間から、赤い光が差ししてきた。

バケモノは更にスピードをあげた。

そうしてそこには、水溜りだけがいつまでも消えずに残された。月だけが、全ての成りゆきを見ていた。